

一宮市 博物館 だより

もくじ

展覧会のご案内

- 企画展「火事と喧嘩は江戸の華 火事装束」… 2
- 企画展「馬と人々の暮らし」…………… 3
- 研究ノート…………… 4
- 歴史探訪…………… 6
- 博物館アルバム(平成23年度)…………… 7
- 平成24年度催し物のご案内…………… 8

No.49 2012.3



火事装束一具 鳥取藩池田家伝来 (一宮市博物館蔵)

火事と喧嘩は江戸の華

火事装束

「火事と喧嘩は江戸の華」といわれるように、江戸時代の江戸は度重なる大火に見舞われていました。幕府は大名火消・定火消・町火消などからなる複雑な消防組織を作り上げますが、それは戦のない太平の時代に新しい武士のファッションを生み出しました。この展覧会では当館が所蔵する毛織物コレクションの中から大名火消が用いた華やかな火事装束を展示し、災害に悩まされながらも生き活きと暮らしていた江戸時代の人々の姿を紹介します。

だいまょう びけし かじ しょうぞく
大名火消の火事装束

火事装束一具
津山藩越前松平家伝来



かじかぶと
火事兜

金属製の兜。前立てや左右に家紋を施す。

しころ
鉢

火の粉がかからないように顔を覆う。兜に金具をひっかけて留める。

かじ ばおり
火事羽織

羅紗（ウール）や皮革など燃えにくい素材でできている。家紋以外の派手な装飾は禁止されていた。

むねあて
胸当

首の後ろで紐で結んだり、羽織にボタンどめで着用する。裏側にポケットのあるものも。

はかま
袴

緞子や縞珍などの高級生地を使い、裾は黒ビロードなどで縁取る。

ぶけ じよせい かじ しょうぞく
武家女性の火事装束



彦根橘紋火事兜・緋羅紗地波に兎模様鉢
彦根藩井伊家伝来



緋呉呂地鯉模様火事頭巾

武家の女性が火災からの避難時に着用した火事頭巾。大名の姫君の嫁入道具には必ず火事装束が加えられており、江戸に暮らす武家女性の必需品であった。頭の部分は皮革製。波に鯉図の刺繍は験担ぎであろう。

消防活動の陣頭指揮を執る武士が用いた火事兜。鮮やかな緋羅紗を用い、兜には大きな前立てを施すなど、機能性よりも威儀を示すことに重点を置いた衣装である。

information

会期 4月28日(土)～6月3日(日)
休館日 5月1日(火)・7日(月)・14日(月)・21日(月)・28日(月)
観覧料 一般200円(160円)、高・大学生100円(80円)、
小・中学生50円(40円)
※()内は20名以上の団体料金

〈企画展〉

馬と人々の暮らし

平成24年6月16日(土)～7月29日(日)

【休館日】6月18日(月)・25日(月)、7月2日(月)・9日(月)・17日(火)・23日(月)

【観覧料】一般200円(160円)、高・大学生100円(80円)、小・中学生50円(40円)

※()内は20名以上の団体料金



木製鐙 大毛沖遺跡

から私たちの暮らしにかかわってきたのでしょうか。

馬具は、古墳時代の中期以降の

一宮市大毛沖遺跡からは、木製の鐙(あぶみ)が発見されています。馬に乗るときに足をかける馬具です。多くは金属製で、木製のものも少なく、大変貴重な資料です。馬は今でこそ私たちの暮らしになじみがうすくなりましたが、「馬」と人の歴史はいつたどのようなものだったのでしょうか。

まず、馬と聞いて一番に思いつくのは競馬ではないでしょうか。旧尾西市の富田山とよばれていた木曾川の河川敷では、昭和の初めから終戦直後まで、農耕馬による草競馬がおこなわれていました。農耕といえば牛が思い浮かぶかもしれませんが、力は牛に劣るもののスピードがある馬が、当時、畑の開墾に利用されていました。富田山は松林で、下は砂地だったため、陸上競技のトラックのように線を引き、馬を競わせていたようです。

また、馬といえば、乗り物に利用したり、荷物を運ぶといった利用法も考えられます。鉄道が作られる前は、馬車

が利用されていました。また、繊維の町(一宮)では、製品を運ぶのに利用

していました。馬は暮らしにかかわる重要な動物でした。では、いつ頃

から私たちの暮らしにかかわってきたのでしょうか。



草競馬の風景(写真提供:一宮市尾西歴史民俗資料館)



繊維製品の出荷風景(写真提供:一宮市尾西歴史民俗資料館)



一宮馬之頭(「尾張名所図会 後編 巻一」より)



絵馬「貴人乗馬の図」(御裳神社蔵)



絵馬下描き(一宮市尾西歴史民俗資料館蔵)

遺跡から発見されていますが、それより前の縄文時代、弥生時代の遺跡から、馬の骨、その中でも馬の歯が発見されています。古墳時代には、古墳のそばに馬が埋葬されている例も発見されており、殉葬されたものと考えられます。また「殺牛馬祭祀」といわれ、雨乞いや虫害を防ぐ目的で埋葬された例も見つかっています。

祭祀といえ、現在でも神社に絵馬を奉納したり、神社の行事で馬を利用する例があります。

一宮市真清田神社で四月に行われる桃花祭では飾り馬(おまんこ)が奉納されますが、「尾張名所図会」には、これを描いた「馬之頭の図」が掲載されています。

古墳時代には、生きた馬を祭祀に利用していたのですが、いつのころからか、木製の馬(絵馬)、土製の馬(土馬、陶馬)をかわりに利用するようになりました。日本で一番古い絵馬は、奈良時代の遺跡から発見されています。ここ東海地域では、須恵器生産がさかんだった背景もあり、陶馬がよく発見されています。

絵馬は現代でもつくられています。一宮市の指

定文化財には、御裳神社所蔵の絵馬「貴人乗馬の図」があります。裏には寛文九年(二六六九)の墨書があり、江戸時代前期のものであることがわかります。この他に尾西歴史民俗資料館には、絵馬の下描きと考えられる資料も残されています。暮らしにかかわってきた馬が死んでしまうと、お墓を作ったり馬頭観音の石碑を建て供養することもあったようです。地名として馬三味や馬場などの地名が残っているほか、馬頭観音は一宮市内でも多数みることができます。このように様々な場所の人と「馬」が関わってきた歴史を垣間見ることができそうです。(松本彩)

丹陽町元屋敷遺跡及び大和町菟安賀遺跡の、戦国期から近世初頭にかけての遺構からは、土師器の小皿が出土している。

土師器は、弥生土器の伝統を引き継いでつくられた土器で、古墳時代以降、長い間作られ続けていたが、小皿は平安時代になってから作られ始めた。江戸時代半ばに磁器が普及するが、なお土師器は使われ続け、京都の北部では、明治時代の初めごろまで、一般的につくられていた。

土師器の小皿は「かわらけ」とも呼ばれ、寺社などでは現在でも使われている。例えば、京都市神護寺では、厄除けの意から、小皿を山から谷へ向けて投げる。また、中世の人々は、杯をかわすときに、京都産の非常に薄手できれいな土師器の小皿を使ったといわれており、文献にはその作法まで残っている。山口県の大内氏館には、どの大きさの土師器の皿にどんな食事を盛り付けたという記録も残る。京都以外の地域では、京都でつくられる薄手できれいな土師器皿を模倣してつくられる場合もあり、そのような地域には、京都の人々と関わりあいのあった人々が住んでいたといわれ、とても興味深い。このあたりでは、名古屋城から京都の土師器皿を模倣したものが出土している。

しかし基本的には、土師器の小皿は日常雑器であり、作られた地域で消費され、他の地域へと運ばれることはあまりない。地域の特徴が色濃く残る資料である。一宮には、どんな土師器の小皿があるのだろうか。

土師器の

お皿は、ロクロを使ってつくる場合と、ロクロをまったく使わずにつくる場合がある。今回紹介する資料はす



写真1 土師器皿内面(菟安賀遺跡)



写真2 土師器皿外面(菟安賀遺跡)



写真3 土師器皿断面(元屋敷遺跡)



写真4 土師器皿内面(元屋敷遺跡)



写真6 土師器皿内面(菟安賀遺跡)

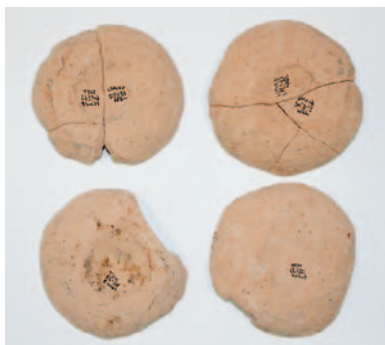


写真5 土師器皿外面(元屋敷遺跡)

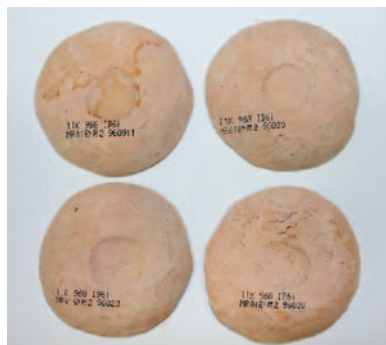


写真7 土師器皿外面(菟安賀遺跡)

べて、ロクロをまったく使わない手づくねの資料である。土師器の小皿と二口にいつても、様々な大きさがあり、またいろいろな形のものがある。写真に示す資料は、直径5.5センチ前後、高さが1.5センチほどある。厚さは厚いところで5ミリほどである。上から見ると何の変哲もないが(写真1)、ひっくり返すと底の部分がへこんでいる(写真2)。

皿の表面を見ながら、つくり方を考えてみよう。まず、丸めた粘土を手のひらで押しつぶすようにして、大まかな皿の形をつくる(明治時代の京都ではひじで押しつぶしていた)。次に、指で皿の縁を押さえ、小皿の縁を立てる。内面をよくみると、指でおさえた痕跡が残っている(写真1)。

皿の外面には、布目あるいは木目のような痕跡があるが、指でおさえるときに指に布をまいていたのか、あるいは、表面をきれいにするために、最後に布、あるいは木の板でなでたのだろうか(写真2)。そして最後に、皿の底を指で押しへこませる。

底のへこみに指を合わせてみると、ちょうど右手の親指で押しただぐらいの大きさである。横から見ると、明らかに底がへこんでいるのがわかる(写真3)。

このような底がへこんだ土師器の小皿は、現在のところ、元屋敷遺跡と菟安賀遺跡からしか出土していない。一宮市内にはほかにも同時代の遺跡があるが、これほどたくさん出土する土師器皿が出土し、底がへこんだ土師器皿が見つかる地点はない。また、一宮市外でも、このような資料はまだ発見されていない。

元屋敷遺跡の資料(写真4・5)と、菟安賀遺跡の資料(写真6・7)を比べると、菟安賀遺跡の資料の方が、底のへこみがはつきりしている。また、菟安賀遺跡の土師器皿のほうが、元屋敷遺跡の資料よりも胎土が白い。そのため、別の場所で作られていたことがわかる。それにもかかわらず、底部がへこんだ特徴をもつということは、土器の作り手が何らかの意図をもっていたことを示唆するのではなからうか。今後、同じような資料が見つかる地点が増えれば、このような土師器皿が、どんな人々によって作られ、時代とともにどのように変化していったのかわかるかもしれない。(松本彩)

□瀬部の竹細工

一宮市瀬部周辺は、近現代まで竹細工が盛んに作られた地域である。江戸時代後期に成立した『尾張名所図会』後編巻六には「瀬部竹籠造」の項がある。瀬部で竹細工を製作し売り歩く様子が描かれており、当時から名産品であったことがうかがえる。しかし、明治以降は徐々に生産者の数が減っていった。大正元年（一九二二）には製造戸数が二〇戸（西成村役場「農商務統計報告綴」）であったのが、現在ではなくなり、瀬部の竹細工の伝統は途絶えてしまったと言える。

□使われた道具とその特徴

従来、竹細工は養蚕が終わった十二月から三月までの冬の副業で、村中が家族総出でおこなっていた。瀬部では、そのほとんどがコマアゲ（イカキ）を製作していた。コマアゲを製作するには、竹ノコギリ・十文字・竹包丁・ヒゴコキ・幅キメ・ミガキ包丁・カンナ・ハサミ・ペンチ・キリ物差が必要であった。しかし、人によって使う道具の種類は様々であり、必ずしも前述したすべての道具を使っていたわけではない。本稿では、熊澤四一さんから寄贈いただいた竹細工の道具から、その特徴を検討したい。

熊澤さんは昭和十年（一九三五）生まれで、昭和三十年頃まで農閑期の副業として竹細工を作っていた。使っていた道具（写真2）には、幅キメ・ミガキ包丁はなく、竹包丁が二丁、ヒゴコキが三丁あった。竹包丁はヒゴを作る際に必要な道具であるが、コマアゲを製作するのに鉋型と牛刀型の二種類を熊澤さんは使っていた。鉋型（実測図1・写真1）の竹包丁は両刃で全長28センチ、牛刀型



写真1 ヒゴコキで抜く
(瀬部/尾関克己さん)

であるが、コマアゲを製作するのに鉋型と牛刀型の二種類を熊澤さんは使っていた。鉋型（実測図1・写真1）の竹包丁は両刃で全長28センチ、牛刀型

(実測図2)

写真2-2の竹包丁は両刃で全長33センチあり、鉋型の方が重い。鉋型は重いで、十文字を入れ竹を分割するはじめの作業の際に用い、牛刀型は分割した後にヒゴ



写真2 熊澤四一さんの道具
1.竹包丁(鉋型) 2.竹包丁(牛刀型) 3~5.ヒゴコキ

を細く割く際に用いた。ヒゴコキは、竹包丁で割いたヒゴの幅を揃えるために抜く作業の際に用いる。片側に竹の柄を付け、片方を手で、竹の柄の方を足の親指の腹で押さえる（写真1）。熊澤さんのヒゴコキは三丁あるが、特に実測図3・4（写真2、3、4に対応する）のヒゴコキに注目したい。実測図3のヒゴコキは4ミリ前後の幅の三角形の切れ込みが十六ヶ所入っている。実測図4は6ミリ前後の幅の切れ込みが八ヶ所入っており、実測図3のヒゴコキよりも太いヒゴを作る際に用いたと考えられる。普段は、主に実測図3のヒゴコキを使用していたようである。細いヒゴと太いヒゴは製作するコマアゲの種類によっても使い分けたようだが、その他にもザルの用途の違いによっても使い分けた。

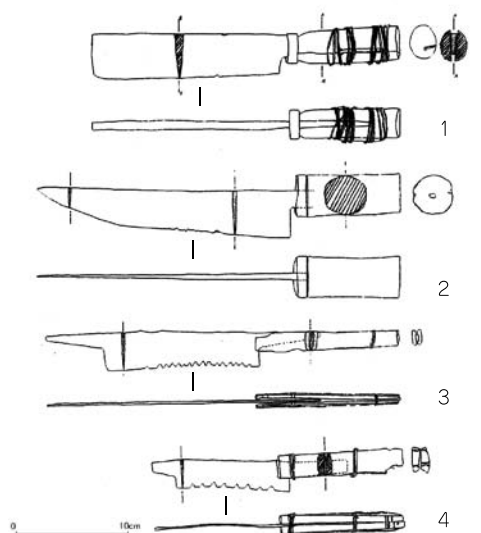
熊澤さんの道具には幅キメ・ミガキ包丁がなかったが、瀬部の他の人には幅キメ・ミガキ包丁を使う人がいた。幅キメでヒゴを整え、ミガキ包丁でみがいたコマアゲは高く売れたが、手間がかかり量産できなかった。人によって持つ道具もそれぞれ違い、作られたコマアゲは製作した人の特徴が見えるものであったという。

□今後の課題

今回は竹細工の道具、しかも限られた二人（軒）が使用していた道具について検討した。日本各地には竹細工が盛んな地域があるが、竹細工の道具や製作技法・流通の視点から、その地域内での竹細工生産の様相を明らかにした例は少ない。瀬部ではほとんどの人がコマアゲを作っていたが、今回取り上げた熊澤さんは知多半島や伊勢湾口部の篠島・日間賀島からも注文を取り竹細工を製作していた。今後は、個々の人が使用してきた道具だけでなく、製作技法や流通について詳細に分析し、瀬部周辺での竹細工生産の様相を明らかにしたい。

(名和奈美)

※本稿を執筆するに際し、熊澤四一さん・房子さんには多大なるご教示を賜りました。末筆ながら、ここに深謝の意を表します。



実測図 熊澤四一さんの道具
1.竹包丁(鉋型) 2.竹包丁(牛刀型) 3.4.ヒゴコキ



写真3 コマアゲ(イカキ)

一宮の熊野信仰

伊勢へ七度 熊野へ三度
お多賀さまへ月参り

これは江戸時代には「やった」俗謡です。信心はどんなに厚くても厚すぎることはないことのとことです。江戸時代には、こゝ一宮からも多くの参詣者が伊勢、熊野へ旅立ったことでしょう。

さて熊野といえば、平成十六年(二〇〇四)七月、高野山、熊野三山、吉野山を含む霊場と参詣道が「紀伊山地の霊場と参詣道」としてユネスコの世界遺産に登録されたことはまだ記憶に新しいところです。これらの霊場は古来、信仰の地でした。鬱蒼と生い茂る山深い地であり、そこには死



熊野観心十界曼荼羅(西萩原・浄観寺蔵)

者の霊が往くと信じられていました(山中他界観)。その後、阿弥陀信仰の影響によって、熊野は極楽浄土とみなされ、参詣者が行列をなす姿から蟻の熊野詣と呼ばれました。

ここでは、一宮における熊野信仰について概観します。

熊野信仰を伝える最も古い史料は『熊野那智大社文書』に収録されている応永二十八年(一四二二)の御師道珍の「讓帖」です。御師とは、熊野で宿泊などの世話をする者をいいます。その讓帖に「禪那房分 旦那尾張国世辺松竹道者」とあり、道珍は旦那を禪那房へ譲っていることがわかります。世辺とは、現在の二宮市瀬部に比定されています。また讓帖には、世辺松竹の道者を導く先達が宝蔵坊であることも記載され、この地に熊野先達を担う宗教者の存在をみることができます。しかし江戸時代に書かれた『寛文村々覚書』には、松竹(現江南市)には七社権現が祀られています。瀬部には神明と富士で、熊野権現が勧請されていません。ただ、この両村に共通する点として「籠作り」があげられます。いつ頃から籠作りが盛んになったかはわかりませんが、ここにみられる旦那は籠作りを主とする職能集団と考えることができます。

また、久承三年(一一三二)には、後鳥羽上皇が熊野那智大社へ尾張国牛野荘(市内)を寄進しています。応永九年(一四〇二)の妙興寺文書には「妙興寺領牛野郷」とみえます。

さて、『寛文村々覚書』からみると熊野権現を勧請した神社は市域に十七カ所あります。また大和町荻安賀に鎮座する熊野社には天正十六年(一五八八)の棟札があります(『新編一宮市史』)。木曾川町黒田の熊野神社は、大宝元年(七〇二)の勧請とあり、最も古い伝承を伝えています(『木曾川町史』)。他にも現在の社名を列挙すると、萩原町串仲室原神社、花井方熊野社、新生熊野社、大和町北高井熊野社、森本十二所神社、今伊勢町本神戸熊野神社などです。

また熊野信仰の代表的な産物である「熊野観心十界曼荼羅」(江戸初期)が、西萩原の西山浄土宗浄観寺に伝来しています。曼荼羅の伝来について知ることは難しいですが、美濃路沿いの西萩原に熊野比丘尼等の宗教者が遊歴し、定着していったと考えることができます。この曼荼羅は別名「地獄極楽の図」とも呼ばれ、中央に円相内の「心」字を配し、その上にアーチ状の山があり、右から左へと人の一生が表現され、熊野比丘尼が女性の往生を説く折に用いら



熊野社(大和町荻安賀)

れ、また熊野三山の修繕費用を勧進するために持ち運びされてきました。現在は表装され軸状になっていますが、折り畳まれた筋があるので、熊野比丘尼等の宗教者が持ち運び歩いてきたと考えられます。また博物館に展示されている真言宗豊山派長隆寺の阿弥陀如来脇侍観世音菩薩像(一一三二)の銘文に「大仏師治部法橋良円」とあります。この仏師は、和歌山県遍照寺の「弘法大師坐像」を制作した「熊野三御山大仏師良円」と同一人物とされ、熊野との深い関係が考えられます。

これらのことから、一宮における熊野信仰は、少なくとも十三世紀頃には定着していたと考えられます。

(石黒智教)

《謝辞》本稿を作成するにあたり、浄観寺大野克昌氏には多大なるご高配を賜りました。末筆ながら、感謝申し上げます。

平成24年度催し物のご案内

※詳細は市広報・ホームページ,または博物館までお問い合わせ下さい。

▼ 2月24日(日)	▼ 11月10日(土)・11日(日)	▼ 11月上旬	▼ 1月5日(土)～2月24日(日)	▼ 12月1日(土)～12月16日(日)	▼ 10月13日(土)～11月18日(日)	▼ 9月20日(木)～9月30日(日)	▼ 9月1日(土)～9月17日(月・祝)	▼ 8月4日(土)～8月26日(日)	▼ 6月16日(土)～7月29日(日)	▼ 4月28日(土)～6月3日(日)	● 展覧会
公演	講座	講座・公演	企画展	企画展	特別展		2012	夏休み子ども展示	企画展	企画展	
民俗芸能公演	尾張平野を語る	市民文化財めぐり	暮らしの中の民具・いちのみやの民俗	2012 一宮市現代作家美術秀選展	一宮の歴史と文化	一宮写真協会展	一宮美術作家協会展	みんなで挑戦!わたしだけの自由研究	馬と人々の暮らし	火事と喧嘩は江戸の華～火事装束	

● 通年講座のご案内 ●

Museum Kids Club～ミュージアムキッズクラブ

▶ 平成23年4月～平成24年3月

ミュージアムキッズクラブは、市内の小学校4～6年生を主な対象として、歴史・民俗・考古・自然・美術などの多彩な分野を総合的に学ぶ講座です。平成18年度から開始し、現在小学生14人、中学生・高校生16人が参加しています。今年度は「江戸時代の文字を読んでもみよう!～この字なんて読む?」「リトルワールドで世界を旅する!」「ここが好き!博物館」「学ぼう!大名文化と尾張徳川家」の4講座を実施しました。



平成23年度講座
「リトルワールドで世界を旅する!」

平成24年度は新会員を増やし、博物館における新しい普及活動を、子どもたちとともに考えていきたいと思っています。

古文書講座～古文書にしたいむ～

▶ 平成23年5月～平成24年2月

5月から新しく20名の方を迎え35名でスタートした講座も、平成24年2月10日、全10回の講座をすべて終了しました。本年度は、時之島村大野家文書をテキストとして使用しました。講座では、往来手形、奉公人請け状、村中名前帳などをとおして、古文書の解読と江戸時代の人々の暮らしや生活文化について学びながら進めました。1回生の方は、初めてみるくずし字に悪戦苦闘しながらも、2・3回生の方とともに、和気あいあいとした雰囲気の中で楽しく学んでいました。



平成23年度の講座より

平成24年度も一宮市博物館保管の江戸期の庄屋文書を中心とした読解、およびその歴史的背景について学びます。(詳細は市広報、ホームページ参照)

一宮市
博物館
だより

第49号

発行日/平成24年3月31日
編集・発行/一宮市博物館
印刷/三井堂株式会社

利用案内

- 【休館日】毎週月曜日、休日の翌日
- 【開館時間】午前9時30分～午後5時(入館は4時30分まで)
- 【観覧料】(常設展・聴講料含む)一般200円(160円)、
高校・大学生100円(80円)、小・中学生50円(40円)
- ※()内は20人以上の団体料金
- ※一宮市内小・中学生は無料
- ※市内在住の満65歳以上で、住所・年齢の確認できる公的機関発行の証明書等を提示された方は無料
- ※身体障害者等の手帳を持参の方(付添人1人を含む)は無料

〒491-0922 愛知県一宮市大和町妙興寺2390
TEL0586-46-3215 FAX0586-46-3216
URL <http://www.icm-jp.com/>



【交通】名鉄名古屋本線「妙興寺」駅下車南口より徒歩7分
ニコニコふれあいバス「博物館西」下車徒歩5分